

## 児童養護施設における学力・進学の実態調査

### 【全体の概要】

社会的養護を必要とする児童・生徒は、十分な学習の機会を得られずに、進学や就職などにも影響を及ぼしていることが報告されています。スプリックス教育財団においては、児童養護施設等出身の大学生を対象として奨学金支給事業を行っていますが、児童養護施設においては、入所前、家庭状況など様々な理由を背景に学業が遅れていた子どもが、学力を取り戻せていないケースも少なくないことが報告されています。つまり、学力において、まずは基礎的な学力を固めることが重要となるものの、その状況にまで至っていない現状があり、それが将来の選択肢を狭める一因となっていることが想定されます。

そこで、今回、児童養護施設を対象に、学力、特に基礎学力に焦点を当て、学力における基礎学力の重要性認識、および、基礎学力の定着状況の把握を主目的に、学力・進学実態調査を行いました。

その結果、主に以下のようなことが確認されました。

### 調査結果の概要

- ① 9割以上の施設において、基礎学力が学習の土台として重要視されているものの、5割以上の施設において、基礎学力の定着していない在籍者の方が多い。
- ② 学力不足の原因としては、「学習意欲不足」や「勉強嫌い」が特に多い。また、在籍者の学力に関する課題としては、「学力の遅れ」「学習意欲の欠如」「学習支援の困難さ」「教育環境整備の必要性」等があげられている。
- ③ 在籍者が、高校卒業後に高等教育機関へ進学する割合は低い。進学に関する課題としては、「経済的な困難」「進学する意欲」「自立」「地理的・環境的問題」等があげられている。

学力を高めていく土台として、基礎学力がまずは重要となることが認識されているものの、基礎学力の定着は十分でなく、その原因となっている「学習意欲の欠如」や「障がい」といった課題に対応できる環境が十分に整っていないという問題が明らかとなりました。

職員の労力軽減という点からも、「ICT活用により、自立性を高め、効率的な学習を提供していく」視点や、「障がいを抱える子どもへの適切な支援体制整備」をはじめ、多角的に、環境改善に向けアプローチしていく重要性が示唆されました。

---

### 【調査概要】

調査対象：33の児童養護施設より回答を得ました。

調査手法：オンライン調査(Google Formを使用)

調査内容：児童養護施設を対象とした、主に学習・進学に関する実態調査

回答者：各児童養護施設職員(施設長、児童指導員、自立支援担当職員、保育士等)

実施期間：2024年7月～8月

---

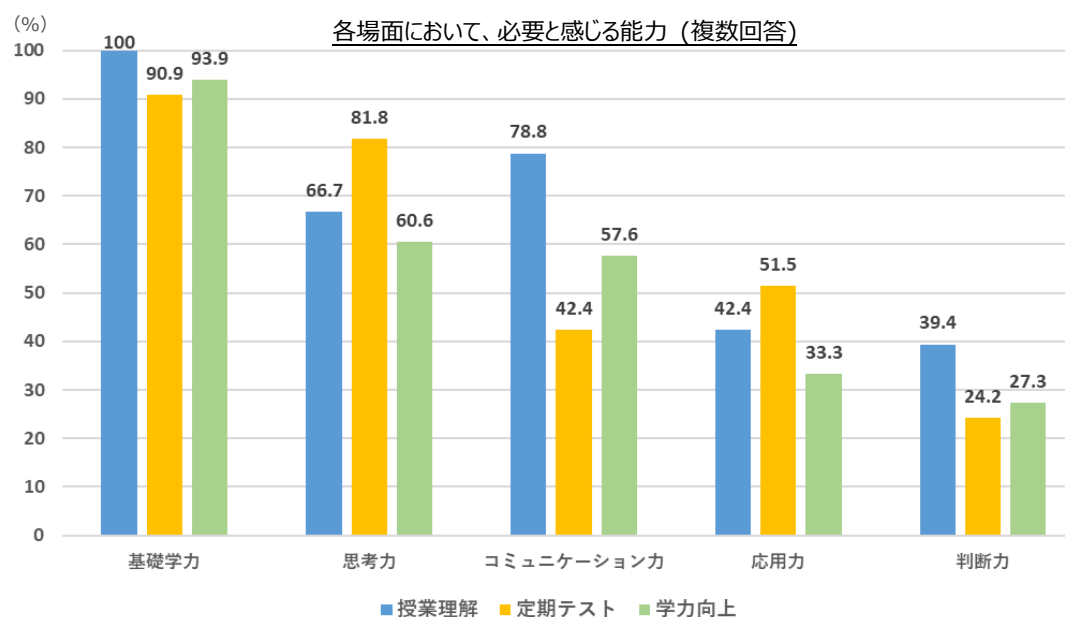
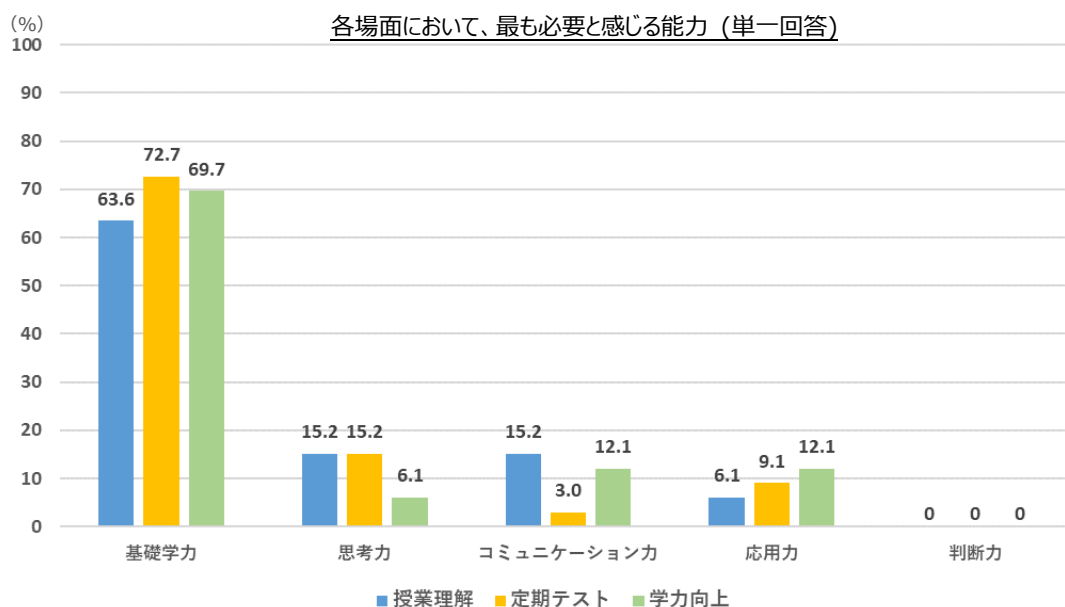
次ページ以降に、具体的な調査結果を報告いたします。

●施設および在籍者 今回分析の対象とした33の児童養護施設の所在地および在籍者数は、以下の通りです。

施設の所在地		在籍者数		
地域	施設数	区分	在籍者数(人)	割合(%)
北海道	0	就学前	152	11.9
東北	2	小学生	455	35.5
関東	10	中学生	306	23.9
中部	7	高校生	334	26.1
近畿	9	高卒生	35	2.7
中国	0	合計	1282	100
四国	0			
九州・沖縄	5			
計	33			

●重要視されている能力 → **基礎学力が、学習の土台として重要視されている**

「学校の授業を理解するため」、「定期テストで、平均点より上の点数を取るため」、「学力を上げるため」という3つの場面において、「基礎学力、思考力、コミュニケーション力、応用力、判断力」のいずれの能力が重要になるかを各施設に確認しました。

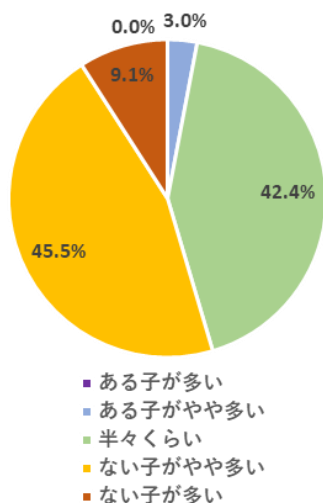


いずれの場面においても、基礎学力がベースとして求められています。その上で、「授業を理解するため」や「学力をあげるため」においては、思考力やコミュニケーション力が重要視されており、「定期試験の点数をあげるため」においては、思考力や応用力が重要視されています。

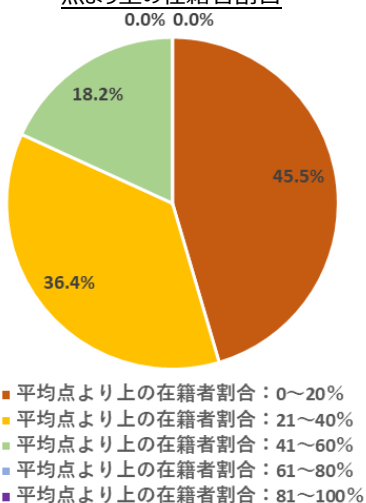
● **学力の実態** → **多くの施設において、基礎学力をはじめとする学力が十分定着していない子どもが多い**

「1. 読み書き・計算・英単語といった基礎学力が定着しているか」「2. 定期テストで平均点より上の点数をとれているか」「3. 学校の授業についていけているか」という観点から、在籍者の学力実態を各施設に尋ねたところ、以下の通りでした。

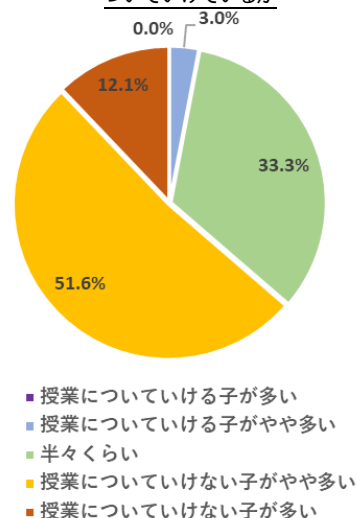
1. 学年相当の基礎学力があるか



2. 学校の定期テストで、平均点より上の在籍者割合



3. 在籍者は、学校の授業についていけているか



1. 学年相当の基礎学力

5割以上の施設で、「学年相当の基礎学力がない子どもが多い(または、やや多い)」状況です。「学年相当の基礎学力がある子がやや多い」施設は3.0%となっていました。

2. 定期テストで平均点より上の在籍者割合

ほとんどの施設で、平均点より上の点数をとれる在籍者の割合が低いことがわかります。45.5%の施設において、平均点より上の点数をとれている在籍者割合は、2割を下回っています。

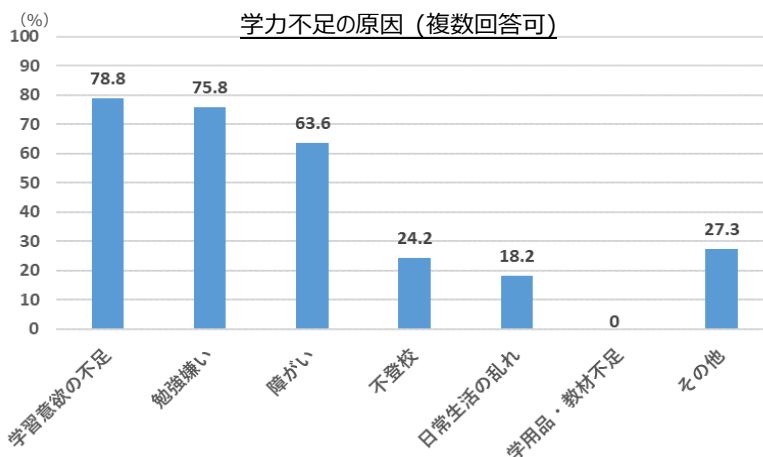
3. 学校の授業についていけている在籍者割合

6割を超える施設において、「授業についていけない子どもが多い(または、やや多い)」と回答されています。

以上のように、多くの施設において、基礎学力をはじめとする学力が十分に定着していない子どもが多い状況となっています。

● **基礎学力の低い子どもが多い理由** → **学習意欲不足や勉強嫌いの子が多い**

ここまで、児童養護施設に在籍する子どもの学力実態を見てきて、基礎学力が特に重要視されているものの、十分定着していない実態が確認されました。学力不足として考えられる原因としては、以下のようなものがあげられています。



「学習意欲の不足」、「勉強嫌い」が大きな原因となっています。

また、障がいによる学力定着の難しさも、6割を超える施設で課題となっていました。

● **学力に関する困りごと** → 「**学力の遅れ**」「**学習意欲の欠如**」「**学習支援の困難さ**」「**教育環境整備の必要性**」等  
 学力に関する困りごと(自由記述)を各施設に尋ねたところ、主に、以下のような問題点があげられました。

学力の遅れとその影響

一時保護や不登校、ネグレクトの影響で学力が欠落している子どもが多く、その遅れを取り戻すのに苦労している。特に中学生になると自信を失い、不登校になる子どももいる。

学習意欲の欠如

勉強に対する興味や意欲が低い子どもが多く、学習習慣が身につけていない。「どうせやってもダメ」など、自己肯定感の低さから学びへの意欲が欠如している。

障がいや学習支援の困難さ

発達障害や知的な遅れを持つ子どもに対する学力向上が難しい。支援が必要な子どもが多い一方で、職員の時間や教えるスキルに限界があるため、個別対応が困難である。

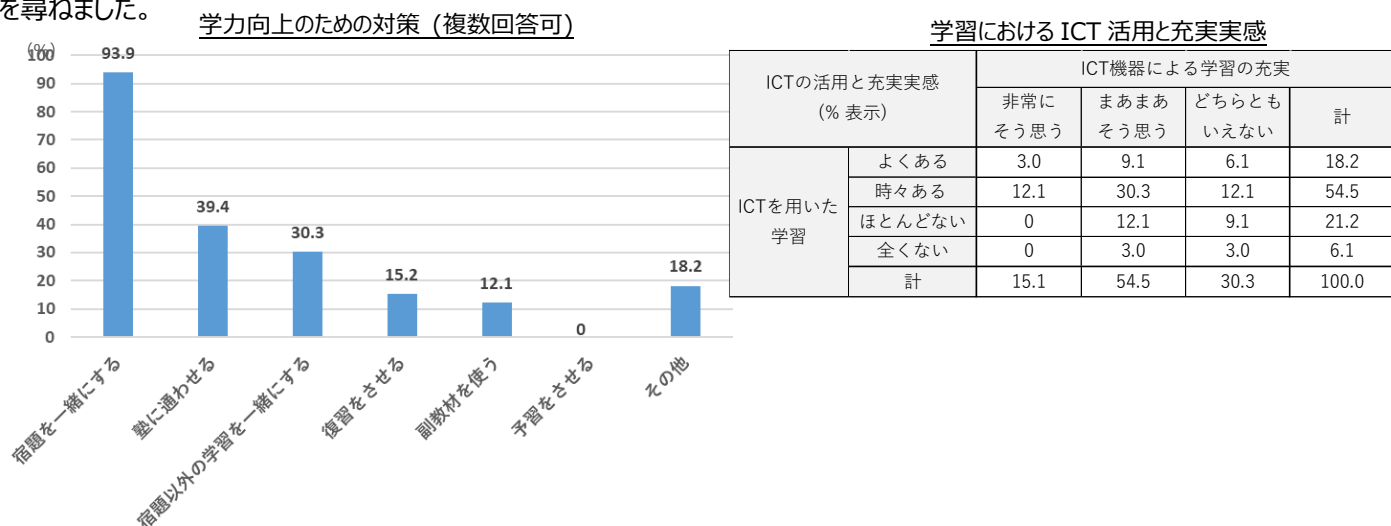
教育環境整備の必要性

子どもたちの学力向上には、まず環境整備が必要とされるが、教材購入や個別指導の時間確保が難しい実態がある。

複雑な背景により、勉強が遅れていたり、学習意欲が高くない子どもが養護施設に入所するものの、その解消まで児童養護施設で取り組むには環境整備が十分ではない実態と言えます。

● **学力向上のための対策と、ICT の活用** → **施設における、学力向上のための対策としては、「宿題を一緒にする」が9割超。ICT 活用や ICT 活用による学習充実感については、十分得られているとは言えない。**

各施設に、「学力向上のためにやっている対策(以下左図)」と、「ICT の活用状況および活用による学習充実感(以下右表)」を尋ねました。



学力向上のための対策については、ほとんどの施設において「宿題を一緒にする」ということがあげられています。学習・生活習慣の定着や、学校の勉強についていけるように、宿題をやることに力を入れている(山口,2021)ことが分かります。

学習塾を含めた習い事について、小学生では、20%弱、中学生では、30%弱、高校生では 10%弱の在籍者が習い事をしていますが(データ掲載略)、割合としては、一般と比較して低い状況です(学校基本調査等から、2017 年の小学生の通塾率は約 46%、中学生の通塾率は約 61%、高校生の通塾率は約 27%と報告されています(Education Career 調べ))。

また、ICT 活用とその活用による充実感については、ICT がある程度活用され、ある程度の充実感が得られているものの、まだ十分に活用され、その充実感が得られている状況ではないことが分かります。

## ●進学率 → 施設在籍者の、高校進学率は高いが、高校卒業後に進学する割合は、一般と比較して低い

33 施設における、2024 年度の高校進学率は、98.2%でした。一方、2024 年度の高等教育への進学率(大学、短大、専門学校)は、31.7%、就職率が 59.8%となっていました。一般的な高等教育機関への進学率は 80%を超え、就職率が 20%未満である状況と比較すると、児童養護施設の在籍者が高校卒業後に就職する割合は、大変高いことが分かります。

## ●進学に関する困りごと → 「経済的な困難」「進学する意欲」「自立」「地理的・環境的問題」等

進学に関する困りごと(自由記述)を各施設に尋ねたところ、主に、以下のような問題点があげられました。

### 経済的な困難

進学にあたり、学費や生活費、一人暮らしの費用など、金銭面での負担が大きい。以前より奨学金制度が充実しているものの、入学前の初期費用や生活費を賄うためにアルバイトが必要となるケースもある。

### 自立と進学の両立の難しさ

施設から自立して進学する際、生活費や授業料の工面が困難であり、支援が不十分なため、中退や進学自体を諦める子どもがいる。また、自立能力が十分育っていない状態で退所すると、進学後に苦労するケースもある。

### 進学のモチベーションの低さ

子どもたちの中には進学の意義を理解できず、将来のイメージが湧かないため、進学のモチベーションが低いケースがある。また、学力の低さや自尊心の低さから、進学することを選択しない子どもも多い。

### 地理的・環境的な制約

地理的な問題で通学が困難であったり、地域に進学先が少ないために、県外進学を余儀なくされ、職員がサポートしにくいケースがある。

経済的な問題に加えて、立地の問題や、それに伴う自立の問題、進学意欲が高まらないといった課題があることが明らかになりました。進学意欲は、そもそも一定の学習が定着しなければ高めていくことが難しいと考えられるため、まずは、支援の中で、自立を目標に、学習習慣を定着させ、基礎学力を高めるための環境整備が重要な点と考えられます。

## ●まとめ、今後の課題

今回の調査を通して、「進学により将来の可能性を広げるために、学力を定着させる必要があるものの、前提となる基礎学力の定着に課題のある状況」が明らかになりました。先行研究においても、一人一人の子どもに付き添える職員と時間、空間を確保することが難しいことや、職員にとって信頼構築や生活習慣の確立が優先され、学習・進学支援まで手が回らない状況が報告されています(山口,2021)。

在籍者の学力を向上させ、自信や意欲を高め、将来の選択肢を広げていくためにも、まずは、その源泉となる「支援環境の改善、生活習慣の改善、基礎学力の定着」といった点が、注力すべき課題と考えられます。

そのためには、一例として、タブレット端末を用いて学習することを職員が支えるなど、職員負担も軽減しつつ、自立性を高め効率的な学習を提供する点が、一つのポイントとなる可能性が考えられます。今回、ICT 活用に関する項目では、ICT 機器による学習の充実実感がまだ高い状況ではありませんでした。一方で、ICT 機器による学習の充実実感を得ている施設もあり、そのような施設ではどのような活用がされているかという点を明らかにすることも、一つのアプローチと考えられます。効率的な学習支援の横展開は、職員の負担をできる限り抑え、効率的に基礎学力を高めることに貢献できる可能性があります。

学力不足の原因としては、障がいも 6 割を超える施設で報告されており、学習意欲を高める視点に加えて、障がいを抱える児童への適切な支援体制も、重要な課題と言えます。

支援環境の改善に向け、多角的なアプローチの検討を積み重ねていくことが重要になると考えられます。

## ●参考文献

山口 季音 2021 『児童養護施設の生活環境のダイナミクス：家庭で暮らせない子どもの育ちと職員の実践』学文社